

日本鉄鋼協会記事

編集委員会

第6回運営委員会 開催日：1月14日。出席者：松下委員長，ほか10名。

1. 各分科会の報告
2. 依論文賞候補論文の査読者選定の件

50年度依論文賞の候補論文として21件の推薦があった。各1件につき5人の査読者を決定した。

第11回和文会誌分科会 開催日：1月10日。出席者：松下主査，ほか27名。

1. 20件の論文について審査報告がなされ，そのうち修正依頼6件，掲載決定14件であった。

2. 「鉄と鋼」第61年第7号に論文13件。

特別講演2件，計15件掲載されることに決定した。

第11回欧文会誌分科会 開催日：1月21日。出席者：橋口主査，ほか16名。

1. 6件の論文について審査報告がなされた。

2. 「鉄と鋼」60年13号から5件の研究論文，61年6号のアブストラクトから7件の研究論文，1件のレポート，「鉄と鋼」以外の国内雑誌から2件の研究論文，1件のレポートについて投稿を勧誘することになった。

第4回出版分科会 開催日：1月10日。出席者：佐藤主査，ほか5名。

1. 鉄鋼技術講座改訂について

昭和34年地人書館より出版された鉄鋼技術講座（全5巻）の改訂を行なう方向で検討することになった。

2. 鉄鋼便覧改訂について

鉄鋼製造法に関連させたデータを中心にしたものに改訂することを考えており，その基礎調査を製鉄，製鋼，加工と行なつて来たがこのたび，加工編のアンケートがまとまり，各部門ごと，データ集としてまとめるにあつての構想を文章化することとした。

共同研究会

電気炉部会

第5回第2分科会 開催日：12月18，19日。出席者：守川部会長，ほか83名。

今回は日本鋼管・京浜製鉄所で分科会を開催した。テーマは省資源，省エネルギー対策および省力化であり，電気炉工程短縮，造塊作業の合理化，集塵，ダストなどの処理および有効利用，炉前分析間の合理化などについて22件の研究報告があつた。

なお，工場見学は日本冶金・川崎製造所と日本鋼管・京浜製鉄所の2カ所で行なつた。

原子力部会

第36回第4小委員会 開催日：12月23日。出席者：一色委員長，ほか8名。

1. 英国原子力学会（BNES）主催の“高温ガス炉とそのプロセス利用”国際会議に出席・発表するとともに，

それに伴い，欧米の研究機関を訪問し，調査された結果について報告が行なわれた。

G.A. では Fort St. Vrain 炉の現状，プロセス・ヒートへの HTGR の利用計画，材料の研究などを調査した。核熱利用プロセスとしては，石炭ガス化，液化，製鉄，水の熱分解，石油精製および化学プラントを考えており，50M\$ を投入する計画である。INCO では興味の対象は 900°C までの様であつた。F & W では，ヘリカルコイル型の熱交換は高価になるとして，鑄造材のパヨネット型 SG の設計研究を行なっている。CENS では，断熱材，SG などを実物大で実験をしており，規模の大きさが印象に残つた。KFA の AVR は 950°C で4ヵ月運転し，安定に動作している。BNES の International Conference には約 400 名が集まり，日本からの参加は約 20 名であつた。53件の論文が発表されたが，ドイツの発表が 23 件で最も多い。800~950°C の温度を考えているものが多く，日本の 1000°C の利用計画は世界的にみると高い。内容は水の分解への核熱利用が多い。

2. ASME および BNES Conference 出席報告

両会議に発表された論文のうち，当委員会に関係のある内容のものをえらび，その要点が説明された。これらについては，担当委員をきめ，次回以降の委員会で詳細検討することにした。

鉄鋼生産設備能力調査委員会

条鋼設備部会

第37回中小形設備分科会 開催日：12月16，17日。出席者：氷内主査，ほか119名。

今回は議題として，定例の「工場操業状況」の他に共通研究テーマとして「省エネルギー」「ロールの組替・型替の合理化」の2件をとりあげた。

「省エネルギー」は，加熱炉，電力，水，その他のエネルギーにつき，原単位低減対策実施例および計画などについて各社から発表が行なわれた。

「ロールの組替・型替の合理化」はその方法，所要時間およびその短縮の改善例，問題点とその対策につき，各社からの発表と質疑応答が行なわれた。

標準化委員会

鉄鋼部会

第31回 SCI 分科会 開催日：12月18日。出席者：川村主査，ほか7名。

1. 第7回 SCI 会議報告

さる11月7~8日ミラノで開催の国際会議報告が詳細に行なわれたが，今後 EURONORM の体系や動向の把握および滴定法に電気的終点決定法の技術レベルの向上のための検討実験の推進が必要であるとの出席者からの指摘があつた。

2. 国際会議提出資料の審議

特に問題視しなければならない資料はなかった。

3. N-BPHA 吸光光度法によるV定量法

カナダ提案の N-BPHA 吸光光度法 (JIS 類似) を検討し、イオン交換分離-ジメチルナフチジン 吸光光度法と比較するため国内共同実験を行なうことになった。

第 6 回 SC 7 分科会 開催日: 12月13日。

1. 切断法について

結晶粒度試験法のうちアメリカ提案の直線切断法と円切断法 (単円法および三円法) について内容の検討を行なった。しかしこのような切断法について日本では経験がないため、試料提供による国内共同実験を行ない、さらに検討を進めることにした。

第 8 回 TC 67 分科会 開催日: 12月25日。出席者: 桑山主査, ほか 11 名。

1. 国際会議報告

10月7～11日ルーマニアのクンピナで開かれた TC 67 総会及び TC67/SC1 及び SC5 の会議報告が詳細に行なわれた。日本は API をベースに意見を提出していたが、かなり API 寄りとなった。

2. TC 67 の参加資格

現在 0 メンバーだが、今後とも SC1 および SC5 との併行開催が考えられるし、国際協調の面からも積極的に参加すべきだとの態度から P メンバーへ地位変更することになった。

日ソ油井用鋼管分科会

第 5 回分科会 開催日: 12月17日。出席者: 川野主査 ほか 8 名。

1. 日ソ標準化懇談会報告

1973 年日本で開催された標準化と品質管理に関する日ソ合同会議を 12 月にソ連で開催したいとの要請があったが、ソ連からの技術資料の提供が僅かで、木材以外は進展してないため 50 年春以降に延期となった。油井管については日本から 12 件の技術資料を送ったが、ソ連からは GOST 3 規格が送られてきた程度で、技術情報の交換にはほど遠い。したがって静観する態度をとることにした。

2. GOST 3 規格の検討

ケーシング、チュービング、ドリルパイプ 3 規格について検討し、日本コメント案を作成した。

鋼質判定試験方法分科会

第 16 回分科会 開催日: 12月13日。出席者: 岩村主査 ほか

1. JIS 結晶粒度試験法

主として高速度鋼に採用されている一線切断法がフェライト結晶粒度試験の切断法と異なり得られる粒度番号が比較法あるいはフェライトの切断法のそれとは全く別のものであるためこれを JIS 法として取入れるかどうか検討したが、時期尚早とし、解説で紹介する程度に止めた。

2. JIS 地きず試験法

試験片仕上面の程度を表面あらさ S で規定するか学振法の様に μ とするか、また切削条件を決めるかどうか検討したが、S と μ の関係については更に調査することで次回に持越した。

また鋼材品質の向上から一段のみの試験が多く見受けられるため実体調査することになった。

国際鉄鋼技術委員会

第 4 回委員会 開催日: 12月27日。出席者: 豊田委員長, ほか 14 名。

1. エネルギー特設作業グループ専門家会議に関連して、鉄連の国際委員会の報告があった。

2. IISI 技術委員会の W. G. の報告があり、第 7 回 (東京開催) の議題について検討した。

製鉄技術調査委員会

第 1 回委員会 開催日: 12月18日。出席者: 小林委員長, ほか 16 名。

通産省では、わが国鉄鋼業の国際化における問題点の解明と今後の国際化のあり方を検討するため「鉄鋼業国際化問題検討会」を設置し、将来予測時期を 1985 年に置く、一貫製鉄所を前提とした海外立地に係る問題を取上げたが、技術問題については当委員会がタスクホース的役割を果たすことになった。

調査検討テーマとして、高炉法におけるコークス比、燃料比、コークス製造技術の予測、天然ガス、石炭、その他燃料による DR、還元鉄の輸送、貯蔵、及びその利用法、スクラップの処理技術、連鑄化予測及び製鋼、圧延技術の予測の諸項目が選定された。今回は細部にわたって技術評価とコスト試算ができるような資料を担当各社で調査することになった。